近衛家のペット！　～妖獣の狐雪～

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
近衛家のペット！　～妖獣の狐雪～

【Ｎコード】
Ｎ１５９２ＢＡ

【作者名】
桜楼月華

【あらすじ】
近衛家に迷い込んだ一匹の妖怪と、その飼い主となる木乃香の御話。
※自己満足小説のため、アンケート類などがないです（気が向いたらするかもしれないけど）。※キャラ崩壊、原作崩壊等が受け入れられない人には勧められません。※作者は寂しいと死んでしまいます。適度な感想を与えましょう。※作者に文才は一欠片もありません。

妖怪用語及単語説明帳（前書き）

わたくし桜楼は、行き当たりばったりで小説を書いていきます。故に、追加設定などが非常に多い。
その中で出てくる単語等を説明して行こうと思います。

妖怪用語及単語説明帳

《妖獣の契約》

・仮契約の様なカードはなし。本格的な契約を交わすと同時、主人の体の一部に『刻印』が浮かぶ。
・念話不可能。
・妖怪の制御可能。
・召喚可能。
・妖怪の《闘獣解放》。つまり力の解放をすると、主へ妖怪の『妖力』がパスとして送られる故に防御力、攻撃力等の肉体的サポートが施される。
・妖怪の肉体的年齢を契約しているうちは止めることが可能。
：簡易的な契約と本格的な契約があり、簡易的な契約は『妖怪を強制的に抑えつける』効果を得る。本格的な契約は『妖怪と人間両者の同意』が必要。効果で言えば、『妖怪を使い魔として従える』。

《畏れ》

・妖怪の『力』。
・「ぬらりひょんの孫」を参照。
・しかし『鬼發』や『鬼憑』はなし。
・畏れの出力こそがその妖怪の力量とされる。

《鬼火》

・《白面金毛九尾の狐》の一族が使う《畏れ》。
・外見的には青白い炎。
・炎の温度調整は術者（白面金毛九尾の狐）の自由。

《狐尾の太刀》

・狐雪が使える唯一の《畏れの応用》。
・九尾内に鬼火を通わせ、尻尾それ自体と尻尾の毛を硬化させる。
・鬼火の密度によるが、大抵の攻撃は防げる。

《尾裂狐の太刀》

・《白面金毛九尾の狐》一族に伝わる家宝であり宝刀。
・制御のできない者が持てば畏れを一気に持っていかれる。更には一気に畏れを吸い取った反動での《刀を持つ妖怪自身の暴走》へと繋がる。

《白面金毛九尾の狐》

・狐雪の妖怪としての種類。
・人を騙すことをなによりの愉悦とする妖怪。
・美女に化けた伝説が残るが、実際のところそれは化けたのではなく「元からその美貌」を持っていたという方が正解だ。更に言えば《美貌の呪い》として一族全てが超絶美女、或いは超絶イケメンに

なる。

・それなりの実力を伴えば九尾や耳を隠し、人間社会へと侵入することも可能。

・子供の《白面金毛九尾の狐》は全ての毛が真っ白である。大人になれば九尾は金に染まる。

妖怪用語及単語説明帳（後書き）

話の中で「わかんねーよこの単語メーン」などと思ったら感想等に書いてください。
その際には、こちらで回答させていただきます。

矛盾点などありましたら御指定してくださると幸いです。できうる限り直します。

大壱話『妖獣の契約』（前書き）

完全な自己満足小説。更新不定期。作者は一応受験生。更に作者には一切の文才も、一片の読解力もないです。

それらを踏まえたうえで読み進めていただきたい。

では、第一話どうぞ。

大壱話『妖獣の契約』

突然ですが、私妖怪です。

近代の人間たちは「妖怪だぞー！」なんて叫んでみても「きゃーかわいー！　こんなちっちゃい子もコスプレするんだー！」みたいな反応をします。嫌なご時世になりましたなぁ。

私達妖怪……特に九尾の妖怪は悪戯こそがアイデンティティ。しかし今の世は不法侵入もできないし（セキュリティ高ぇ……）、子どもと遊んでたら「早く帰りますよ！　あんな変な子と遊んではいけません！」とか言われるし（いや、これは昔からか。あの時は「なぁに妖怪と遊んでんだバカたれ！！」だったけど）。

それにしても、私達妖怪は妖怪を騙したり悪戯をするなんてこと、そうしません。今の私は人間の肉体年齢的には十四歳。……実質的な年齢は既に百年を超してたりするけど。

そんなわけで、今の私、逃げてます。

え、どんな訳だって？　私だって知らないよ。突然包帯ぐるぐる男が炎の剣を持って襲ってきたんですから。私がどんな訳なのか知りたいくらい。

「ねえ！　少しくらい話を聞いてくれてもいいんじゃないの！？」

「うるせえ、どうでも良いから死ね」

とまぁこの通り。ええ、話を聞く耳持たないおバカさんなんです。

そんなおバカさんに既に脇腹を刺されました。
溜息が出そうです。
とりあえず昔と今では大違いの民家の家の屋根をぴょんぴょん跳ねて逃げてるんだけど……。

どかあぁん！

どばぁああん！

がっしゃぁぁあああん！

私が避ける度に炎の剣で民家を潰してますこの人。

「ちょっと、力任せとか止めてくれない？　避けてる私の方が心苦しくなるんだけど」
「オメエが避けなければいいだけだ」
「死ねと？」
「そう言ってんのが分かんねえのか、メス犬」
「犬じゃない、狐だ！　この九尾が分からんのか、お前は！」

そう言うわけで避けて避けて避けてます。

お、なにやら結界のある場所を発見。『境界破り』でも使えば、結界の中に入るのは簡単なことだし。

「さっさと仇討たれろ、駄犬がぁ！」
「誰が駄犬だ！　駄狐（だこん）と呼べ！」

あ、間違った。
駄狐ってなによ。

「くっ……」

私の畏れ(ちから)である《鬼火》を足に纏わせる。鬼火は九尾だけが使える個別能力みたいなもの。

鬼火は青白い火だ。その炎を足に纏ったところで別段スピードが増すというわけでもない。使い方次第では可能だが、今回に限っては速度なんて二の次だ。

赤い屋根で急停止。更に急回転。男と対峙する形になる。

「っ……」

男も止まるかと思ったが、どうやらそれはないらしい。余程私に怨念があると見える。

こんな人と面識ないんだけど……。

止まりそうにない剣を横にかわす。とんでもない熱気が左半身を襲ったが、今はそれどころではない。少しくらいダメージを与えて、逃げ切らなければ。

「うらあ！」

右足で相手の横腹を蹴った。うめき声と共に男は吹っ飛び、地面へと落ちた。

「よし、逃げよう」

もう一度足に鬼火を纏わせる。これは攻撃じゃない。速度アップのための鬼火だ。

＊　＊　＊

「はぁ……はぁ……ここまでくれば、大丈夫でしょ」

『境界破り』で結界を掻い潜り、山の中を駆ける。しかしさすがに体力の限界。木に寄り掛かり、一息吐く。

傷は……意外と深い。血は未だに止まることを知らず、流れ続けてる。このままでは逃げたは良いけど失血死してしまう可能性まで出てきた。

「誰か、いるんですか？」

その声を私の耳が捉えた。鬼火を周囲に灯らせその声の元を睨みつけた。

「……っ！　妖怪！！　それも九尾か！」

男性はメガネをかけ賢そうな人間だった。私をいきなり妖怪だと咄嗟に判断し、逃げもせずに刀を抜いたということはそれなりのやり手……。ていうか刀を持ってる時点で吃驚。今の世ではじゅーとほーいはんとかで捕まるんじゃなかった？

「む……怪我をしているのですか？」

「貴方には、関係、ないです……」

貧血からか、頭がくらくらする。

それでも鬼火をなんとか維持し、毛を逆立てて威嚇を続ける。

「そんな怪我をした人を放ってはおけません」
「……お人よしですね。昔の人なら弱っていることを良いことに殺そうとしているのに」

笑って強がった。
しかし、確かにある意味限界だ。くらくらするどころか、視界がかすんできた。まるで霧に覆われた様になにも見えなくなっていった。

「詠春様！　それは！？」
「妖怪。それも九尾の大妖怪。……保護の準備を」
「は！？　正気ですか、詠春様！！」
「正気です。……幾ら妖怪でも怪我をしているこの子を放ってはおけません」
「……分かりました。では、せめて力の封印を……」

異常な程に男性と女性の声が遠ざかっていった……。

＊　＊　＊

自然の香りが遠くから匂う。
身体を包む温もりのなか、私は起きた。目を開けると、どうやら私は白い布団に寝かされている様だ。うつ伏せで。
まぁ、尻尾があるし……当たり前か。

「……ていうか、ここどこ」

当たり前な感じに起きようとして、疑問が虫の様に湧いてきた。

ここはどこなのか。
あの妖怪はどうしたのか。
何故私は寝かされているのか。
そもそもこの状況はなんなのか。

「わひゃん！？」

わしっと一本の尻尾を誰かに掴まれた。忌々しげに背後を睨む。
そこには女の子が二人立っていた。見た目は四歳だろうか。いや五歳かもしれない。
しかし、彼女たちが何歳なのかはこの際どうだっていい問題だ。
問題は、そんな幼児とも言える彼女等を、何故私が見上げる破目になっているのか、だ。

「ビックリさせてもうた？」

こくりと……というかぶんぶんと頭を縦に振って頷いた。

「このちゃん……悪戯せんほうが……。怒られるで？」

髪の毛を腰まで伸ばした女の子のことをこのちゃんと呼んだ、サイドテールの女の子がビクビクと怯えながら言った。

「大丈夫や。お父様は害ない言うてたやん」
「え、いや。その子に怒られるんちゃうよ、詠春さんに怒られ――」

その時、部屋の襖がススス……と開いた。

「おや、眼が覚めましたか」

そこには先程のメガネをした男性が立っていた。
自動的に警戒モードになった。

「シャ――――！」

毛を逆立てて威嚇。近寄るなと暗に言う。

「狐ちゃん、お父様のこと嫌いなんか？」
「……おいお前。私になにをした」

女の子を無視して、その後ろに立つ男性に向かって言う。
私の身体をこんな小さくしてくれやがったのはほぼ絶対の確率でこの男だと直感が告げた。

「あまり警戒しないでください。……木乃香、刹那君。ちょっと二人で遊んできなさい」
「は、はい」
「はーい。行こ、せっちゃん」
「うん」

長い髪の毛の女の子がサイドテールの女の子の手を引いてどたどたと足音を立てて部屋を出ていった。

「……さて、では少し御話しをしましょうか」

＊　＊　＊

「……確認です。怪我をした私を貴方は放っておけず、保護した。しかし私を危険視した人達を抑えるために《妖獣の契約》を交わしたと……」

妖獣の契約。

妖怪と人間は本来交わられぬ存在同士。だがそれの《本来交われない境界線》を無くす契約だ。しかしその契約は本来結ばれることはそうそうない。なぜなら、妖怪が上に立つことができないからだ。だから、この様に妖怪が気絶してる間に強制的に契約を結ぶ他にない。

「で、そんな強制的な契約をしてくれたおかげでこんな姿と……」

さっきまでいた女の子よりも背が低いかもしれない。

「ええ、すいません。契約で無理矢理力の封印をさせないと、過激派の方々がうるさいもので……」

過激派たるものがどんな者たちなのかは知らないが……。それよりも気になることがある。

「私の主は、誰なんでしょうか」

まさかあの小娘たちが自分の主なんてことはないのだろう。もしそうなら私は自害してでも契約を破棄する。

「勿論私です。貴女の力の制御も、私に任させていただければ良いのですが」

「……怪我の手当ても貴方が？」

下の袴は着ているが、上はサラシを巻いただけで服など着ていない。別に、服なんて自分の体温を保持するための物の為構わない。今は夏だし。
ただ問題は、私は殿方なんかに上半身を曝け出したのかということだ。

「いえ、私は治癒に長けているわけでは無いので……。専門の治癒術師に任せました。勿論、女性ですよ」

どうやら気の使い方は分かるようだ。
少しだけ安心。

＊　＊　＊

「こちらが木乃香。こちらが刹那君です」

小さな巫女服を貸してもらい（何故このサイズの巫女服があったのかは知らない）、それを着た私は二人の女の子の紹介を受けていた。

「うちが木乃香や。よろしゅうな、狐ちゃん」
「せ、刹那と申します！　え、えっと、よろしく、狐ちゃん」

木乃香は柔らかい性格だということがモロに出ている感じ。刹那は、逆に堅苦しい感じだ。

「私に名前はないから九尾の狐って呼んでくれると嬉しいかも」

営業スマイル。
まだ木乃香のことを信用した訳ではない。いつ何時尻尾を掴んでくるか分からないから……。
しかし詠春さんの娘だというのだから、仕方ない。

「名前がないんかぁ。一々九尾の狐ちゃんって呼ぶのもなんやめんどいし、ウチが名前付けたろか？」

木乃香は嬉々として提案した。それを拒否する理由も無し、勝手にさせておいた。

＊　＊　＊

「ユキちゃん、行くえー」
「おー！　来ーい！」

蹴鞠で遊んでます。いやそれにしても、木乃香は良い子です。今の世の子はゲームをしていてこの様な文化的な遊びをしようとしないからね。

え、別に楽しんでませんよ？

そうそう。私の名前は狐雪と書いてコユキに決まったらしいです。なんでも雪のように白い毛並みの髪と尻尾を持ってるから、だとか。いや別に気に入ってなんかないから。

「次はせっちゃんやー」
「刹那ー、行くよー！」
「は、はい！」

三人で遊んでいる姿を、縁側で詠春さんが眺めてたりする。なんか微笑んでた。

＊　＊　＊

「ユキちゃん、どうしたん？」
「お風呂だけはやー！」
「なんでや、外で遊んだんやからあかんえ」

二人に襟首を掴まれ、「あーうー」などと呻きながら引き摺られて大浴場の脱衣所まで到達。水浴びを偶にするくらいだった私からすれば水に肩まで浸かるなんて有り得ない話。

「ほれ脱いでー」

一秒で脱がされた。
どんな仕組みなのか皆目見当もつかない。

「そのまま露天風呂の様な浴場の中へと引き摺りこまれる狐雪であった……」
「誰に説明しとるん？」

＊　＊　＊

子供三人で入るには広すぎる大浴場で木乃香に頭を洗われていま

す狐雪です。
わしゃわしゃと自分の髪の毛が泡立ってるのを見るとなんだか妙な感覚になる。
「痒いところはありまへんかー？」
「ありませんよー」
木乃香はさっきから髪の毛をわしゃわしゃする一方で全然洗い流そうとしてくれない。このままだと私の髪の毛が全て抜けそうだ。
「そろそろ流してほしいな～」
「ん、そうなん？　しゃあないなぁ……もちっとやりたかったんやけど」
桶にお湯を淹れて、それを頭からばしゃっと被せられる。
それを何度か繰り返してからシャワーで頭を洗い流される。さっきの桶の御湯になんの意味があるの。
「せっちゃんせっちゃん。今度は身体洗うで」
「ええ？　さ、さすがに身体はええんとちゃうかな……？」
刹那まで私の頭を洗ってた。いや、一緒に洗ってたわけじゃないのか。ただ見てただけ？
ていうか木乃香は今なんて言った？
「あかんあかん。ユキちゃんじゃあ尻尾の根元まで手が届かんから洗えへんやろ。ウチらで洗ったろ」
「……」
「もふり放題やで」
「……！？　ええよ、洗おうこのちゃん」

えー……。

「ちょ、ま！　尻尾だけ、は！　っ！？！？　～～～～～～～～～～～～っ！！！！」

＊　＊　＊

私達九尾は、武器にしていない時に限って性感帯の様な働きをする。つまりそれがどんな意味かと言うと。

「……」

私の行動不可能を示す。

木乃香と刹那に尻尾をもふもふと触られ、性的な刺激を与え続けられた私は遂に風呂の中にぷかーっと浮かぶだけの存在となっていた。

「ユキちゃん、怒らんといてぇな～。まさか弄られると変な気分になるなんて思わんかったんよ～」

「う、うちも……」

二人は懲りずにお風呂の中でまで尻尾をもふってくる。謝るくらいなら触ってくるのを何とかしなさい。

「まぁいいけどさ」

「あ、ええんか？　じゃあ遠慮なく」

「いいってそう言う意味じゃ――にゃぁぁぁあああああああ！」

＊　＊　＊

お風呂での大惨事を近衛家の女中さんに片付けさせることになった。申し訳ない。

「ユキちゃんの尻尾って石も砕けるんやな……恐ろしいやっちゃ」
「木乃香と刹那が触ってこなければあんな風にはならなかった」
「ごめんな～」モフモフ。

だから寝るときまで尻尾をもふってくるのは止めなさいって。
最早この感触に慣れ始めてきた……。

ちなみに、今は木乃香の部屋にいる。詠春さん曰く、私を妖獣として従者にさせた理由の大半は刹那と言う未熟な護衛の代わりに立派な護衛をこなしてほしいからだそうだ。
ちなみに魔法使いとかいるらしい。
なにを馬鹿なこと言ってるんですかとか言ったら「妖怪だって同じ様なものでしょ」と言われてショックを受けた。

「せっちゃんもはよ寝よ！」
「……」
「触りたくてうずうずしとるんのばればれやで？」
「で、でも……ウチが近づくと、ついモフってしまいそうで……！」
「……もういいよー。別に嫌な気分になるわけでもないし……」
「え、じゃあ変な気分ってどんな気分なん？」
「大人な気分」

「……？」

木乃香にはまだ早い話だから遠回りに直球な回答をしておいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1592ba/

近衛家のペット！　～妖獣の狐雪～

2012年1月4日00時58分発行